

退官にあたって

内 田 豊 (天文学専攻)



私は学生時代から数えると40年余り（この間外国生活もあったが）東大でお世話になりました。東大に様々な思い出と共に愛着が無いと言ったら嘘となりましょう。しかし定員枠のある大学が、若い人々の流入を保証し組織の活性を最大とするために、定年制という中々乙な制度を設けて、古手は60歳になると、まだ違う世間に接するポテンシャルが十分あるうちに新天地を求めて転身して行くことになっているのは決して悪いことではありません。

東大への愛着と言っても私の場合、日本的なウェットなものでなく、少々ナショナリスティックなドライなもので、東大への「期待」と言ってよいかも知れません。自分達が果たせなかったことを次の世代に要求するというのは世間の家庭などでもありがちなことで古い世代の身勝手かも知れませんが、世間の親達の場合と同様、悪意は全くありませんので、以下、少々きつい事も言うかもしれませんが、これは東大が発展して世界での最先端に伍して人類の智を開いて行く事を望んでという以外の他意は全く無いので、ご寛容の程を予めお願いしておきたいと思います。

私だけではないと思いますが、我が国のこれまでの文教政策（ここでは特に大学に限ることにし

ましよう）には本当に齒がゆい思いがありました。アメリカの大学や研究所にしばらく滞在して帰ってくるたびに東大のインフラストラクチャーの乏しさに愕然とし、これで先進国と言えるのかと慨嘆したものです。設備は不十分というよりむしろ無いと言うべき状態、必要なスペースも無く、研究サポートも殆どないに等しい。特に過去10年程は日本の社会が豊になって行くのに大学は何も改善されないという事態が続きました。手前味噌かも知れませんが、教官、学生は外国のそれらに比べて決して劣っているとも思えないのですが、これでは他先進国の一流大学と太刀打ちは困難だと思いました。

これは有馬先生が総長の時に、「捨て身的アピール」をされて、やっと産業界、そして国も認識し始め、改善への兆しが出て来ました。日本は高速道路などの例でも分かりますが、ダメだ、ひどい、といわれても何年もの間、事態は改善されませんが、一旦やることになると結構やりますから、大学の手当も遅すぎたが、これから良くなるでしょう。

しかし今度はまだ大学の側で21世紀を目指した抜本的飛躍への青写真が出来るのが遅れているというのが現状ではないでしょうか。柏の計画はあるにしても、本郷が主体の役割を放棄するのでない以上、本郷の改善が不可欠の筈ですが、これが（理学部は建物が立つことになったと言っても）まだ本当の議論がされていないように思われます。存在している本郷のキャンパス計画を見ても従来の学部の縄張り意識を越えられないものであり、慌ててこれ迄のものを余り検討されずにフリーズしたに過ぎないように思います。21世紀を見越した理想的都市型大学への脱皮のための再開

発計画（例えば、人工地盤を作って地下に実験設備を収納して、地上の建物は適切に統合、高層化して建物の間には緑地を増すなど、次の百年に耐え得る計画）は、ついにまともに議論されたとは言えません。さらに本質的なこととして、大学として将来世界の先端を走れる基盤を造るためには何をしなければいけないかについての構想が出て来ないのではないのでしょうか？ 折角の理学部の変革を例に取っても、万一、大学院への呼称の変更、教官の格上げ等のみに終わらせてしまっただけで世界の先端を走れる体制になるかと言うと、全くそうではないのです。助手が格上げで減った分若い人の補給が減れば組織の活発さは減りますから、ポストドクトラル制度の充実（例えば主要研究大学には固有枠を設けてもらうなど）をあわせて実現して行かなければいけないし、また、折角増えた広域理学が柏に皆行ってしまうのではいけないのではないのでしょうか。広域理学部門は専攻の枠を越えた共通の関心を持たれる分野で、10億円クラスのプロジェクを大学でも行なう事を可能としたいと考えて進めた訳で、例えば総ての専攻の研究基盤となる情報処理の先端化プロジェクト、その他を、時代の激動に受け身的に切り裂かれてしまうのではなく、未来を見込んだ変身を自ら進めて時代を先取りする発展を作り出

す戦略が必要なのではないのでしょうか？ 過ぎた事ですが例にとりますと、生物関係の柏行きの問題では理学部教授会の議論は従来型の全部包含型理学系ということに重きを置かれた方も多かったようですが、従来型はそれなりのメリットもあるにしても、結果的には生物関係に関しては名だけを取って実を手放してしまう形になってしまったのではないのでしょうか？ むしろ他学科も、理学部の生物関係が自ら変身し新しい生命科学系の核となるのを応援すると共に、自らも十分21世紀に対応出来る物理科学系科学の系となり、行く行くは物理科学の系、化学科学(?)の系、etcとそれぞれ変身しつつ展開して行くと言う方法もあったのではないのでしょうか？ 大きくなったものが変身せずにただ膨張を主張してもダメで、既存部分が時代により良く適合したものに変身するプロセスで新しい増も得て体制を整えるというのが当事者以外にも受け入れられる可能な新時代適応のパターンのように思います。このような痛みも伴うプロセスを選択する道は容易なものではありませんが、本当に我(が)に捉われないで理学部の高度の衆智を純化結集できれば道は開けない筈がないと思います。私は外に去りますが、残る皆さんが、将来の日本のために、最善の道を開かれる戦いをして行かれるのを心から応援したいと思っています。

